教育ひと口メモ

# 複式学級

義務教育課

複式学級というのは、その学校の一学年の人数が少ないために、二つの学年で一学級を編制して、教育活動を営む学級のことです。

学年の編制の仕方によって、順則複式学級（例えば、小学校三・四年等）と、変則複式学級（例えば、小学校二・三年等）に分けられます。

## 1、複式学級の二つの教科指導

複式学級での教科指導は、主に学年別指導と同単元指導とに分けることができます。

どちらの方法にするかは、学校や地域の実態、教科の特質、指導方法の長所・短所、教師の指導力などを考慮して決めることが大切です。

本県の場合は、学年別指導が大部分ですが、今後、同単元指導の在り方についても積極的な研究が望まれます。

年間の指導計画も、学年別指導にするか、同単元指導にするかによって大きく異なってきます。表1は、その指導計画の類型です。

表2は、国語の三・四学年の同単元同教材指導の展開例です。三年生の教科書教材を取り扱う際には、四年生の指導事項への配慮が必要です。

表1

- 学年別指導
  - 異教科の組み合わせ：1単位時間の中で、学年別に異なる教科を指導する。
  - 同教科異単元の組み合わせ：1単元時間の中で、同じ教科で学年に応じた指導をする。
- 同単元指導
  - 一本案：異内容・異程度。学年差が明らかになっているが、可能な限り共通の指導場面を設定して指導する。
  - 二本案：同内容・同程度で教材を構成する。年度ごと（A年度・B年度）に教材がかわって指導する。
  - 折衷案：一本案を主体に、一部二本案を取り入れたり、二本案を主体に一部一本案を取り入れる案等で指導する。
  - 完全一本案：2個学年分の教材を1年間で学習できるよう精選し、2年間くりかえして指導する。

表2　学習指導の展開例　教材　白いぼうし

① 本時の目標

表現に即して読み、少女はちょうであることをとらえることができるようにする。

〈第3学年〉
少女はちょうであることを、少女やちょうの言動から読み取ることができるようにする。

〈第4学年〉
少女はちょうであることを、少女やちょうの言動、そのほかの表現から読み取ることができるようにする。

② 学習活動の展開

| 学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1．本時は「少女はほんとうにちょうだったのかどうかを調べる学習」であることを確認する。 | ○少人数学級という特性を生かし、児童の反応を具体的にとらえていく。 |
| 2．「少女はちょうだったのかどうか」について、現時点での自分の考えをノートに書く。 | ○へき地の児童は友達の意見に動されがちであるとか、複式学級では上学年の意見に下学年が流されるとか言われている。そこで、まず自分の意見をしっかり持たせる。（反応をとらえる。） |
| 3．少女はちょうだったのかどうかが分かる表現に〜〜〜を付けながら読む。 | ○**3年生は「少女の言動」を中心に読み取り、4年生は「少女の言動や場面の様子」をも含めて読み取らせる。個人差にも配慮する。** |
| 6．少女はちょうであったかどうについて、根拠を明らかにして自分の考えを発表する。 | ○**3年生を先に発表させ、行き詰まった時4年生に助言させるようにする。** |
| 7．少女はちょうであったのかどうかについて、根拠を明らかにしてノートにまとめる。 | ○児童の反応を整理し、導入時と比較することにより、学習の深まりをとらえる。 |

## 2、学年別指導の工夫

(1) 「ずらし」

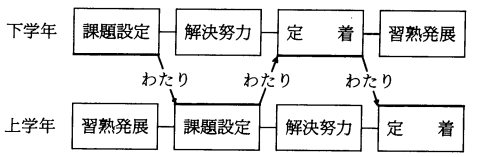
学年別指導を行う際には、直接指導と間接指導とを交互に充実したものにすることが大切です。

下の図は、指導過程における段階ごとの「ずらし」の例です。デッドタイムが少なく「異内容・異程度」で進める教科で効果的です。

(2) 「わたり」

二つの学年を、一人の教師が同じ時間に指導しますので、教師は両学年に交互に移動して直接指導をすることになります。この教師の移動のことを右の図のように「わたり」といいます。

どちらの学年を先に直接指導するかは、レディネスの状況で決まりますが、一般的には、上の図のように下学年が先です。




※図中の太い実線は直接指導